

日本精神保健社会学会

平成 25 年 9 月 15 日

THE JAPAN ASSOCIATION OF
MENTAL HEALTH SOCIOLOGY

事務局：東京都豊島区西池袋 2-39-8

ローズベイ池袋ビル 3F

<日本学術会議学術研究団体 No. 1001>

東京メンタルヘルス株式会社内

TEL 03-3986-3220 FAX 03-3986-3240

ニュースレター第 49 号

発行人：宗像恒次 編集人：上田敏子、窪田辰政

第 19 回学術大会・総会のお知らせ（最終版）

●開催日：平成 25 年 12 月 1 日（日）

●会場：筑波大学東京キャンパス 119 講義室

●大会テーマ：「見通しの立たない時代のメンタルヘルス」

大会実行委員長 帝京大学理工学部准教授 滝澤 武

今日、政治経済面だけでなく、安全保障の面からも、自然環境においても、見通しの立たない時代の中にはいり、私達がどのように生きていけばいいか全く予想がつかない時代がきている。このような時代のストレスは、私達のメンタルヘルスに直接悪影響を及ぼすが、その苦しみや痛みを通じ、自分のこれまでの世界観や人生観が問い直され、私達がどう生きればいいのか、何をしたいのかという自己探求や愛情の絆がもとめられている時代でもある。

●プログラム

第 1 部（10：00～12：00）

10：00～ 一般演題発表

12：00～ 昼食・休憩

13：00～13：30 学会総会

第 2 部（13：40～16：30） シンポジウム

「見通しの立たない時代のメンタルヘルス ―自己探求と愛情の絆の時代へ」

1. 組織依存のキャリア病、うつ—自己依拠のキャリアへ

栗原 壯一郎（（一般社団）オリエンタル労働衛生協会 メンタルヘルスマネジメント・サポートセンター所長）

職場に心を病む人は多い。大きく様変わりする時代に、自らの立ち位置が見えなくなったことにその誘因を感じる。自らの姿を第三者の評価尺度に委ね、自己の確立をないがしろにしてきた結果か？そうした時代のメンタルヘルスを社会的な視点で掘り下げてみたい。

2. 家族の見通しがつかなくなる病、引きこもり—あるがままの自己へ

武藤 清栄（東京メンタルヘルスアカデミー所長）

ひきこもる若者たちの多くは、親からの価値観の押しつけや仲間からのいじめにより、周りに対して不信感を抱き、それを般化させた結果、自分の人生に見通しがたたなくなった状態といえます。この打開策を考えます。

3. 自己肯定感をつくりだす社会とは

殿山 希（筑波技術大学保健科学部保健学科鍼灸学専攻准教授）

11歳の時に視覚に異常が生じた。病名がついたのは18歳だった。28歳の時、鍼灸マッサージの道に入った。たくさんのあきらめと新たな希望。不満と苛立ち、悲しみ、私の思い…。今一度、自分の道を考えてみたい。

討議者 畠中 宗一（大阪市立大学教授）

司会 宗像 恒次（情動認知行動療法研究所 筑波大学名誉教授）

17：30～ 懇親会

- 参加費：1）一般 4,000 円 会員 3,000 円 学生 2,000 円（学生証のコピーが必要）
2）懇親会 4,000 円
3）シンポジウムのみ参加 一律 2,000 円

★一般演題 演題名・抄録提出期日の変更について★

発表希望者は演題名を 10月15日(火)までに事務局へお申込みください（FAX または郵送にて）。抄録については、10月末日までに事務局まで提出してください。

（抄録枚数：A4 用紙 1 枚程度 書式：タイトルは中央揃え、氏名（所属）は右寄せ、本文の構成については特に指定はありません。）

アクティブな高齢社会をめざして

服部メディカル研究所所長 服部 万里子

近況報告

平成 11 年に渋谷で第一号の NPO 法人「渋谷介護サポートセンター」を立ち上げ、介護保険のケアマネジメント単独事業の実践をしてきました。私も非常勤のケアマネジャーとして 14 年間、地域の要介護者や家族とむき合ってきました。

大学では社会学を学び、一般企業で 10 年勤務後、病院に勤めながら看護師資格を取得し、病院では 10 年仕事しました。最後は事務長でした。その病院が思いを込めて創設した有料老人ホームの営業責任者として働きましたが、病院もホームも人手に渡り、それをきっかけに看護師だけで「服部メディカル研究所」を創設し 25 年目です。

高齢社会の調査研究で介護職の腰痛防止の研究や感染予防、持ち上げない介護技術など福祉工学と連携し調査し、学会発表や提言を行い、研修をしてきました。

この間、大学では社会福祉の教育に 12 年間携わり、社会福祉を目指す学生に高齢者福祉や介護技術論、社会福祉援助技術などの携わりを通し、福祉の現場で苦闘する姿、ゼミ生の成長する姿や活躍するたくましい生き方に接し至福の時間を過ごすことができました。昨年、大学を定年退職し、公益社団法人長寿社会文化協会の理事長として、参加型でアクティブな長寿社会の実現に全力投入しています。

研究内容

「高齢者の虐待予防」をライフワークとして、調査・研究を行い、ケアマネジャーや地域包括支援センターでの教育実践をしています。虐待予防は平成 6 年から「認知症の電話相談＝ぼけ 110 番」の相談員をしたことが契機になっています。「おじいちゃんを殴ってしまい、顔がはれているのでデイサービス休ませましたが・・・もう耐えられない・・・」等の介護者の悲鳴と向き合い、共に傷つく姿・孤立する在宅介護のジレンマのさなかに介護保険がスタートしました。

介護保険を歓迎し、アメリカの高齢者ケアマネジメントを学び、「サービスから独立すべき」の理念で一切サービスを併設せずケアマネジメントに取り組みました。一切断らず、どのような困難事例も向き合う事を理念に 24 時間時間対応してきましたが、赤字が 10 年間続きました。平成 21 年度改定で「予防プラン＝要支援のケアマネジメント」をしていても特定加算が取得できるようになり 10 年目で黒字になりました。ところが 3 年経過して最近、また赤字になり、ケアマネジメントだけでは生きていけない制度のゆがみを実感しています。

2012年	「最新図解でわかる介護保険のしくみ 改訂版」単著	(日本実業出版社)
2012年	「介護自殺・心中・殺人の防止とケアマネジメント」単著	(立教大学コミュニティ福祉学部経要14号)
2012年	「地域包括ケアの課題」単著	(ケアマネジメント学)
2012年	「MINERVA 社会福祉士養成テキストブック11 高齢者介護に対する支援と介護保険制度 第2版」共著	(ミネルヴァア書房)
2013年	「うかる！ケアマネジャー試験突破一問一答 2013」共著	(エクスナレッジ)
2013年	「市民後見人養成講座 2 市民後見人の基礎知識」共著	(民事法研究会)
2013年	「もっと知りたい！おとしよりのこと①～⑤」監修	(岩崎書店)
2013年	「服部万里子のケアマネジメント実践法 ーインテークからケアプラン評価までー」単著	(中央法規)
2013年	「最新版 介護ビジネス実践ガイド」単著	(PHP研究所)

関連学会情報

第20回日本運動・スポーツ科学学会に参加して

江橋由夏¹⁾、河内山冨¹⁾、佐藤優果¹⁾、窪田辰政^{1, 2)}

(1)筑波大学, 2)静岡産業大学)

2013年6月8日(土)、神奈川大学横浜キャンパスにて「第20回日本運動・スポーツ科学学会」が開催された。今大会は第20回の記念大会であり、「健康をマネジメントする」をテーマとして、各大学の研究者、専門家により、特別講演やシンポジウム、口頭・ポスターでの発表等が行われ、最新の研究の成果が発表された。今大会の様子について報告する。

特別講演は神代雅晴氏により「エイジマネジメント～高齢社会への産業保健戦略～」という演題で行われた。シンポジウムでは、「健康をマネジメントする科学」というテーマのもと、代謝、睡眠、ランニング、体育科教育の4つの側面から議論が行われ、健康を保つための方法や課題等について検討した。また口頭発表では「開発途上国における保健教育」「日本プロ野球」「炭水化物摂取量」など6件が発表され、ポスター発表では、「大学ゴルフ授業」「南部町の高齢者」「大学駅伝ランナー」など11件が発表された。筆者はポスター発表にて「中学生におけるストレス源認知とストレス反応の関連」と題し、中学生においてストレス源認知とストレス反応には有意な正の関連があり、ストレ

ス源認知、ストレス反応総合得点共にある程度の性差、学年差があることを報告した。また「行動変容技法を取り入れた身体活動介入研究における現状と課題」では、国内で報告された先行研究をもとに、行動変容技法を取り入れた身体活動介入研究の課題を発表した。どちらの発表に対しても様々な質問・意見を頂き、筆者にとって、今後研究を重ねていく上での参考とすることができた。

今回の記念大会全体を通して、様々な分野・観点から身体的また精神的な健康維持につながる研究がなされていることが再確認された。対象も学生から高齢者まで幅広い年齢層が含まれた報告を得られ、大変有意義な学会であったと考えられる。

年報及び大会抄録集残部のお知らせ

過去の年報および学会抄録集について販売いたします。年報については、Vol.1～13までは1,500円、Vol.14以降は2,000円、学会抄録集は500円で販売いたします（いずれも税込）。年報の残部は残りわずかですので、ご希望の方は学会事務局までお早めにお申し込みください。送付の際に郵便振込票を同封しますので受取後郵便振込でお支払い下さい。

- 年報（1996 Vol.2, 1997 Vol.3, 2000 Vol.6, 2004 Vol.10, 2005 Vol.11, 2006 Vol.12, 2007 Vol.13, 2008 Vol.14, 2009 Vol.15, 2010 Vol.16, 2011 Vol.17, 2012 Vol.18）
- 大会抄録集（1997年, 1998年, 2000年～2002年, 2004年～2007年）